



「見たり、聞いたり、探ったり」No.242

通算 No.394

青 木 行 雄

南極「昭和基地」について

私の知人から「南極の石」をプレゼントされ、桐箱に入れて大事に保管している。

この「南極の石」の呼称は、国際委員会において「アンタークティカイト」と定められたようである。

この南極オングル島の石は、地球最古の年代である先カンブリア紀の貴重なものといわれ、少なくとも5億年より古い先カンブリア紀の「片麻石」で世界でも最も古い岩石の部類と聞いた。また片麻石は白い石英や長石の間に黒い角閃岩、黒雲母、ガーネットなどが層状、あるいはゴマ塩状に入っている変成岩の一種であるというのが専門用語で難しい。しかし、大変希少価値のある石だと思うので大事にしたいと思っている。

そんなことで、この石があったところはどんなところかなどで

このたび、この「南極の石」があった、「南極大陸」と「昭和基地」について少々興味がわき調べてみることにした。

この南極大陸には40を超える越冬基地が点在しており、基地を所有する国は夏季のみ設営される基地を含めると30ヶ国以上にのぼる程あるらしい。

そもそも南極とは南極条約により自国の領土として主張することを禁止されている地域のようなものである。

そんな地域に気象観測や生物、地質、地形の研究の目的として各国の基地が建設されたのはわずか100年程前であるとのこと。



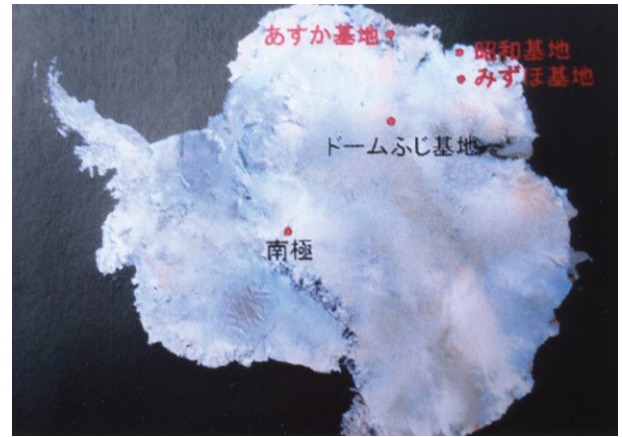
「南極の石」縦10cm×横16cm×巾8cmぐらいの石であるが5億年というからすごい年月での物石といえる



「南極の石」大変重く、何双かになっており、重圧感があって、オーラが出るようだ



昭和基地は日本から直線距離で約14,000km離れたリュシオ・ホルム湾東岸、南極大陸氷縁から西に4kmの東オングル島に位置している。国立極地研究所資料より



南極にある日本の基地、日本の基地は4ヶ所の内、越冬基地は「昭和基地」と「ドームふじ基地」の2つという 国立極地研究所資料より

現在でも南極基地では国家間で情報を交換しながら様々な研究が行われており、最近では観光客の増加に伴い観光拠点としての役割を担う基地も出て来たらしい。

複数ある基地の中でも、人類が南極に基地を建設し始めた当初から研究が続けられているのは、日本を含めた数ヶ国しかないとのことである。

日本が所有する基地は「昭和基地」「ドームふじ基地」「みずほ基地」「あすか基地」の4つあるという。

この4つの基地の中では、1957年(昭和32年)に建設された昭和基地が日本初の南極観測基地である。現在でも有人の越冬基地として使用されているのは、「昭和基地」と4つの基地の中で最も内陸に位置する「ドームふじ基地」の2つであるという。

みずほ基地は現在ではドームふじ基地へ向かう中継地点として、あすか基地は無人の気象観測基地としてそれぞれの役割を果たしているということである。

そもそも定住者がいない南極では基地に滞在する隊員に対し、“越冬交代”という人員の入れ替えが定期的に行われている。

少し意外に思われるかもしれませんが、南極にいる隊員の全てが長期間基地に滞在しているという訳ではありません。

中には冬を越えず数ヶ月しか滞在しない隊員もあり、実は同じ隊員でも滞在する期間によって隊員の呼び方が変わるらしい。

夏の3ヶ月間、南極に滞在する人たちを「夏隊」といい、1年通して滞在する人たちを「冬隊」(または越冬隊)と呼び、全隊員の総称として“観測隊”という名称が使用されるのが一般的なようである。

この観測隊を構成するメンバーの大部分は「国立極地研究所」という政府機関の職員や研究員の皆様が行かれているという。

彼らはそれぞれ専門分野の研究・観測、または実験が目的で派遣されるメンバーである。

しかし、極地で生活していくためには食事や電気・水道といったライフラインの確保やネットワークや衛生設備保守など、様々なサポートが必要である。

そんな生活のサポートをするために派遣されるのが「設営部門」と呼ばれる専門知識やスキルを持った人たちの協力がある。

設営部門の人たちは企業から派遣されるが、もちろん基地で共同生活を行うため観測隊や越冬隊のメンバーとして参加することになるのである。

この南極地域観測隊員は約60人で、その内約40名が越冬する、翌年度の隊が来た観測船で前年の越冬隊が帰国するため、基地には常に人がいることになる。隊員はオーストラリアまで空路で移動し、そこから南極観測船に乗船する。

今の南極観測船は海上自衛隊所属で自衛官(女性含む)によって運航されている。先にも記したが所管は文部科学省で国立極地研究所、2017年(平成29年)2月から、2018年(平成30年)2月を担当したのが58次観測隊で、2018年2月からは59次観測隊、2019年2月からは60次観測隊の担当となる。越冬交代式は近年通常2月1日に行われているという。

1次越冬隊の際に有名になった樺太犬など犬ぞり用の犬は、その後、環境保護に関する南極条約議定書により生きた動物や植物などの南極への持ち込みが禁止されたために現在はいないという。

隊員は国家公務員の男性であるが、専門技能を持った民間企業の社員や、みなし隊員として民間企業出向の女性も派遣されているらしい。隊員は精神面も含めて「完全に健康」であることが求められ、高血圧などの生活習慣病を抱えるものは採用されない場合がある。越冬中は個人に対し4畳半の個室が貸与されるようである。

昭和基地の歴史について調べてみた。

昭和基地の歴史は、ほぼそのまま日本の南極観測の歴史という事のようにも見える。

1951年(昭和26年)に国際地球観測年が提唱されると、日本はこれに参加を希望したのである。当初は赤道観測を行う予定であったというが、予定地の領有権を持つアメリカの許可がもらえず、1955年(昭和30年)2月、南極観測に切り替え、12ヶ国による共同南極観測に参加した。本来は2次で終了する予定であった。準備期間が短く、観測船「宗谷」も旧船を急ぎ改造したものであった。観測隊出発まで基地の場所も決まらず、決定は隊長に一任されていたという。

1956年(昭和31年)に出発した南極観測船「宗谷」で、永田武隊長率いる第1次南極観測隊53名が東



第1次南極地域観測隊の上陸地点の立看板である
国立極地研究所資料より



ヘリコプターによる空輸、基地に着陸のヘリコプター 国立極地研究所資料より



氷上輸送中の雪上車 国立極地研究所資料より

オングル島に到着した。1957年(昭和32年)1月29日に永田隊長以下上陸したのである。そして「昭和基地」と命名したのである。翌々日の1月31日にその名を正式決定したあと2月1日より建設に取りかかった。そして2月8日、永田隊長はここで一夜を明かしたと書かれている。そして永田隊長ほかは2月15日に離岸した。このとき建設された棟は4つで、うち1つは発電棟であった。隊員のうち西堀栄三郎副隊長兼越冬隊長以下11名が越冬したという。この第1次隊は観測器具が凍りつくなどの極度の困難が続いたといわれる。このときに輸送などで活躍したのが、樺太犬による犬ぞりであった。一方、2月15日に離岸した「宗谷」は分厚い氷に完全に閉じ込められ、2月28日に当時の最新鋭艦だった旧ソ連の「オビ」号に救出されている。その時大ニュースになった。



第4次越冬隊員の福島紳が遭難、「福島ケルン」と名付け、南極の史跡遺産に指定 国立極地研究所資料より

1958年(昭和33年)第1次隊に続けて隊長となった永田隊長率いる第2次観測隊を乗せた「宗谷」は深い岩氷に挟まれ、接岸を断念せざるをえない状況だったようだ。

そして2月14日、第1次越冬隊の全隊員は飛行機とヘリコプターで脱出したという、大変さが目に浮かぶようだ。犬のうち15頭はその後の活動のため残された。しかし天候は回復せず、2月24日正午、永田隊長は越冬不成立を宣言したと記されている。犬はそのまま置き去りにされたとも記されていた。たとえ動物とはいえ、共同生活を共にしてきた隊員にとっては、身を切られる思いだったのではと思われる。

当初第2次で終了する予定であった観測隊が第2次観測隊の不成立により第3次まで延長され、1年後に第3次越冬隊が昭和基地に到着すると、犬のタロとジロの2頭が昭和基地で生き残っているのが発見された。このニュースを聞いた時は感動で胸がときめいた事を今でもはっきり覚えている方も多いと思う。動画でタロとジロが近づいて来て荒々しくほえる様は涙が出る程だった。この逸話は映画「南極物語」になり、大ヒットした事も覚えている。



調査・観測の為に造られた、気球や建物 国立極地研究所資料より



昭和基地の建物、寒さにたえられる建物で、ドームふじ基地では-79.7℃あった事もあるという 国立極地研究所資料より

1959年(昭和34年)1月から3月までの間、「宗谷」がプリンスハラルドに接岸の期間中、「宗谷船内郵便局昭和基地分室」が基地内に置かれた。

1960年(昭和35年)10月10日、基地内でそりを固定しようとしていた第4次越冬隊の福島紳(1930年-1960年)が遭難した。同10月17日死亡が確認される。遭難地点には越冬隊によってケルンが建てられた。このケルンは福島ケルンと呼ばれ、1972年(昭和47年)に環境保護に関する南極条約議定書に基づき南極の史跡遺産に指定され、日本では「南極史跡記念物」に定められているという。福島隊員の遺体は1968年(昭和43年)に、基地より約4キロ離れた西オングル島で発見されたという。

当初第2次で終了するはずだった南極観測隊は、結局第5次まで延長され、さらに再延長を求める声が高まったようであるが「宗谷」の老朽化により、1961年(昭和36年)出発、1962年(昭和37年)帰還の第6次観測隊(越冬せず)により日本の南極観測は中断し、昭和基地は再び閉鎖することになったのである。

その3年後の1965年(昭和40年)に新しく竣工された南極観測船「ふじ」による、第7次観測隊および越冬隊から再開することになった。1983年(昭和58年)の第25次観測隊より「しらせ」に代わるまで18年間、18回の観測隊を「ふじ」が勤めてくれたのである。私の「宝物」として保管する「南極の石」は第22次の「ふじ」にて、運ばれて来た5億年の変成岩という事になる。大変貴重で、非常に希少価値のある石なのである。

1973年(昭和48年)9月29日に昭和基地は国立極地研究所の観測施設となった。

1978年(昭和53年)11月25日、NHKが職員11名を派遣し、基地内に南極放送局を開設する。1979年(昭和54年)1月28日から2月3日にかけて世界初の南極からの衛星中継を実施している。

その24年後の2003年(平成15年)1月から、2004年(平成16年)1月2日まで、基地内にNHK南極ハイビジョン放送センターを開設した。職員5名が2002年(平成14年)12月から越冬してセンターの建設と日本へ放送の送信を行っていたが、2004年(平成16年)3月に帰国した。代わって、2004年(平成16年)1月

1日から朝日新聞の南極支局が開設されたようである。

砕氷艦「しらせ」の老朽化により、観測活動の継続に支障が懸念されたが、2006年（平成18年）にユニバーサル造船舞鶴事業所において、後継艦が建造された（2007年（平成19年）起工、2009年（平成21年）5月完成）。艦名は先代に引き継ぎ「しらせ（2代）」となり、2009年（平成21年）の第51次南極観測隊および越冬隊から再び運用開始したのである。

昭和基地にかかわりの深い、観測船歴代の船「宗谷」「ふじ」「しらせ」（初代）「しらせ」（2代）と4代にわたって活躍している南極の基地について、少々勉強ができた。

そして、この昭和基地には、現在天体・気象・地球科学・生物学の観測を行う施設がある。この施設は大小60以上の棟からなり、3階建ての管理棟のほか、居住棟、発電棟、污水处理棟、環境科学棟、観測棟、情報処理棟、衛星受信棟、焼却炉棟、電離層棟、地学棟、ラジオゾンデを打ち上げる放球棟などがあるという。

長年南極観測隊員の努力の結晶が今の昭和基地に実ったと思われる。そんな事を思いながら、頂いた卓上にある「南極の石」をみつめている。時々タロとジロの南極風景が脳裏に浮び、夢までみてしまった。

参与資料

国立極地研究所
南極観測資料より

令和2年3月22日記



タロとジロ

出典：映画「南極物語」

<https://eiga.com/news/20130626/9/>